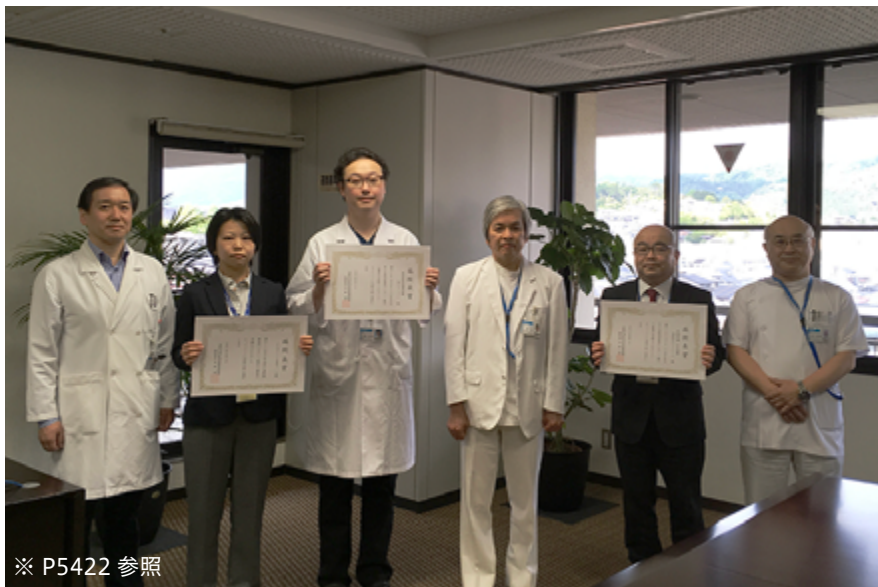


京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5422 参照



※ P5416 参照



※ P5417 参照

2020.7
No. 750

目次

[大学の動き]

- 令和2年度 総長裁量経費採択事項 5414
- 卒業生から本学にマスク5万枚の寄附目録が贈呈 5415

[部局の動き]

- 京都大学研究資源アーカイブが全面リニューアルしたウェブサイトを公開 5417

[寸言]

- 世界は刺激に満ちている 鈴木 伸弥 5418

[随想]

- 科学の応援団 5420
- 名誉教授 八尾 健

[洛書]

- 老化哀感仮説 近藤 祥司 5421

[話題]

- 令和元年病院長賞表彰式を挙行 5422

[訃報]

- 田中 渥夫 名誉教授 5424
- 梶 慶輔 名誉教授 5425
- 梅原 郁 名誉教授 5425
- 原田 誠 名誉教授 5426



京都大学



令和2年度 総長裁量経費採択事項

令和2年度の総長裁量経費については、下記の28件が採択されました。
採択事項および対象部局等は次のとおりです。

採択事項名	部局等名	関連部局等
視覚障害学生への学習支援	文学研究科・文学部	学生総合支援センター
卓越した課程博士論文の出版助成事業	文学研究科・文学部	
若手研究者出版助成事業	教育学研究科・教育学部	
若手研究者に係る出版助成事業	法学研究科・法学部	
若手研究者の優秀学位論文等出版事業	経済学研究科・経済学部	
経済資料センター所蔵未整理・未公開資料のデジタル化に向けた調査等事業	経済学研究科・経済学部	
京都大学桂図書館スタートアップ事業	工学研究科・工学部	附属図書館
京都大学工学部建築学教室創立100周年記念「京大建築学と千年の時空（仮題）」出版事業	工学研究科・工学部	防災研究所，地球環境学堂，人間・環境学研究科
食料・環境・農業に関する人文・社会科学領域の学位論文に対する出版助成事業	農学研究科・農学部	
「清風荘と近代の学知」出版事業	人間・環境学研究科・総合人間学部	医学研究科，大学文書館
若手研究者出版助成制度	人間・環境学研究科・総合人間学部	
外国人研究者等宿泊施設リノベーション事業	霊長類研究所	
東南アジア研究に関わる若手出版助成	東南アジア地域研究研究所	
京都大学発「先制医療」具現化のためのデータベース構築プロジェクト	医学部附属病院	
サイバーフィジカル混成による全学向けフィールド実習教育の展開	学術情報メディアセンター	フィールド科学教育研究センター，農学研究科，理学研究科，生存圏研究所，人間・環境学研究科
オープンコースウェア（OCW）プラットフォームのリニューアル事業	高等教育研究開発推進センター	情報環境機構，事務本部（教育推進・学生支援部）
ワシントン条約に基づく特定科学施設登録のための基礎調査	総合博物館	理学研究科，農学研究科，薬学研究科，人間・環境学研究科，生態学研究センター

大学の
動き

採択事項名	部局等名	関連部局等
次の100年に向けた京都大学の森を用いた「超学際知」教育研究フィールド推進事業	フィールド科学教育研究センター	農学研究科, 人間・環境学研究科
全学共通科目の中国語系科目におけるCALL教材・ウェブサイトの作成	国際高等教育院	
若手教育・研究者に係る出版助成事業	国際高等教育院	
アフリカ・オフィス拠点の運用による教育・研究・広報・産学連携事業の国際化推進	アフリカ地域研究資料センター	学際融合教育研究推進センター, 国際戦略本部
京都大学アフリカ研究出版助成	アフリカ地域研究資料センター	医学研究科, 農学研究科, 工学研究科, 理学研究科, 文学研究科, 法学研究科, 経済学研究科, 教育学研究科, 地球環境学堂, 人間・環境学研究科, アジア・アフリカ地域研究研究科
国立大学ICT協働事業体設立に向けたフィジビリティスタディ	情報環境機構	
研究者同士の研鑽と未踏領域創出をねらった学術分野越境推進	学際融合教育研究推進センター	
フィールド放射線モニタリングとリスク評価に関する学習プログラムの開発事業	環境安全保健機構	
全国大学保健管理研究集会開催に関わる事業	環境安全保健機構	医学研究科
有害廃棄物管理・持続可能な生産消費への取り組みによる、SDGsランキング指標の改善	環境安全保健機構	
課外活動、正課教育及び七代戦のための支援	事務本部（教育推進・学生支援部）	国際高等教育院

(財務部(財務課))

[目次に戻る ↗](#)

卒業生から本学にマスク5万枚の寄附目録が贈呈

新型コロナウイルス感染症の影響により緊急事態宣言が延長される中、本学卒業生である株式会社Plasma代表取締役 遠野宏季氏から、5万枚のマスクを本学に寄贈するとの申し出があり、5月7日(木)に寄附目録贈呈式を実施しました。

同氏は、昨今の状況を鑑みオンラインでの実施となり、室田浩司 産官学連携本部長が受領しました。

遠野代表取締役と室田本部長は、マスク不足における現状などの意見交換を行い、今後も社会問題を解決するための事業を目指す遠野代表取締役と本学との間でさらなる交流を深める

大学の
動き

ことで一致しました。

遠野代表取締役のコメントは以下のとおりです。

「外に出て経済活動を行う必要がある方々を新型コロナウイルスから相互に守る上で非常に重要なマスクが、依然として深刻な品薄となっている現状を打破するために、月間1,000万枚のマスク注文を可能とする中国の工場および商社と提携し、誰でも簡単にオンライン上でマスクを購入できるサービスの提供を開始しました。

そうした中で、お世話になった母校の役に立ちたい、これを機に寄附文化が広まってほしいと5万枚のマスクの寄附を決めました」



オンラインでの目録贈呈式の様子（左から室田本部長、遠野代表取締役）

(産官学連携本部)

[目次に戻る ↗](#)

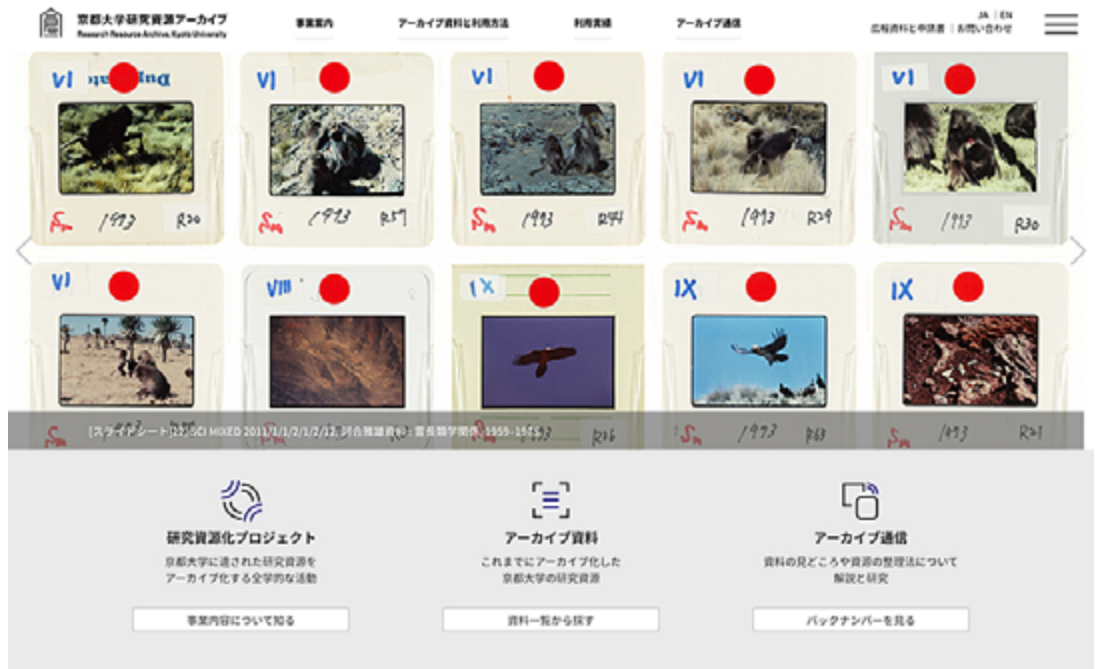


京都大学研究資源アーカイブが全面リニューアルしたウェブサイトを開

京都大学研究資源アーカイブは、4月28日(水)に、全面リニューアルしたウェブサイトを開しました。

今回のリニューアルでは、研究ノート、講義ノート、研究会レジュメ、フィールド・ノート、調査写真等といった、これまでにアーカイブ化してきた資料の利用について、新しく「利用実績」と「利用方法」とのページにまとめました。このうち利用実績では、アーカイブ化した資料の利用例を見ることができます。利用方法では、目的に応じた手順にしたがって資料の利用申請ができます。

併せて、京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」や日本の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」へのデータ提供も開始しました。



京都大学研究資源アーカイブ

【関連リンク】

- ・京都大学研究資源アーカイブ
<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>
- ・KURENAI (研究資源アーカイブのページ)
<http://hdl.handle.net/2433/250881>
- ・ジャパンサーチ (研究資源アーカイブのページ)
<https://jpssearch.go.jp/organization/kurra>

(総合博物館)

[目次に戻る ↩](#)

世界は刺激に満ちている

鈴木 伸弥



吉田山からの道すがら、こんなに贅沢に時間を使えることはもうないな、と柄にもなく思い卒業したのは1979年。それから、東京の保険会社に就職し、もう40年以上が過ぎた。

この間を教科書風に要約すれば、「1980年代、1990年代は日本経済の黄金期であり、世界のなかでも大きな影響力を持つに至り、その後のバブルの終焉によって現在まで停滞が続く」40年ということになる。

しかし、私の実感は異なる。

「黄金期」も「停滞期」もない。楽しいだけでなく、シンドイだけでなく、何度となくオモロイことに刺激されてきた、という感が強い。

こうした刺激は、京大の四年間に始まる。様々な色のヘルメットや立て看の出迎えからして刺激的であり、極めて個性的な友人たちとの議論はさらにオモロかったのである。全く異なる視点の提示、牽強付会ストレスの論理性、異なる事象、分野を統合する鮮やかさ、等々まさに多様性をみたという思いがある。

しかし、実社会は生身の世界であり、多様などという言葉を通り越してゴチャゴチャ感が強度を増し、感情と論理がピミヨーに交錯する。

こうした社会の有り様は、人間が感情を持つ以上、変わらず繰り返されていくだろうが、世界の距離と時間の制約が縮小するにつれ、論理に支えられた知の集積が進み、そのスピードも増している。

山極総長のWINDOW構想にあるInternational and Innovativeを実感する。

Innovationの源泉である知の交換は、既に、国内に閉じてはおらず、また人の間で閉じるものでもないと思われる。とりわけ、凄まじいスピードで進んでいくデジタルテクノロジーは、社会のあらゆる所にその可能性を示しつつあり、生身の感情ですら、アナリティクスの対象になっている。

しかし、知の交換は、深く自身と対峙する個がなければ高まっていかない。

京都大学は、研究者、企業人、官僚など特定した将来の何者かを輩出するだけの場ではなく、知の探究を志すWild and Wiseな人々が集う場だと私は勝手に思っている。

そうした人々とともに過ごすなかに、現在進行形ではなかなか実感できないだろうが、振り返れば、得がたいほどに静謐な時間があっと思えてくるはずである。

今では世界からの観光客が集まる京都であるが、学生だった当時は、街自体が思索的な空間であり、そこで過ごせたというのは、今にして思えば望外という他ない。

京都という地、大学という場は、無為な時間も含めて「個」を磨きあげる、得難い機会となる筈である。

そうした「個」が、あらゆる人々が刺激を受け、新たな知を獲得しようとする場に分け入り、そして、新たな価値をともに切り拓いていく、刺激に満ちた世界が待っている。



最後に、この紙面をお借りし、お願いをさせて頂きたい。縁あって京大ギャングスターズの後援会長をさせていただいております、皆さんの物心両面の熱い応援をお待ちしています！

(すずき のぶや、明治安田生命保険相互会社取締役会長 代表執行役、
昭和54年理学部卒)

[目次に戻る ↗](#)

随想

科学の応援団

名誉教授 八尾 健



無観客といえば、野球やサッカーや大相撲などのスポーツを思い浮かべられるかもしれません。しかしここで言いたいのは、われわれ自然科学（以降、科学と略します）に携わる科学者についての無観客です。わが国は、科学に関心のある人が決して多いとは言えません。実際、人口当たりの科学雑誌の購入数で、日本はアメリカの10分の1とされています。「自分は科学に弱い」と、誇らしげに言う人もいます。誰にでも得意不得意がありますから、不得意であることは一向に構いませんが、少なくとも誇らしげには言わないでほしいと思うのは、筆者だけでしょうか。科学に関心が無いのが問題とは思わない、これでは、科学が人間活動の全てにますます関わってくるこれからの世界に、伍していけるのでしょうか。多種多様の理科離れ対策が講じられています。しかし、筆者自身も経験があるのですが、なかなか十分に効果を上げているとはいえません。理系人材を増やすことに、少なからず限界を感じることも否定できません。

スポーツに目を転ざると、野球でもサッカーでも大相撲でも、多くの応援団あるいはサポーターあるいは観客、ひとくくりに応援団と言うことにして、彼ら彼女らがいます。応援団は、実際には競技をしません。プロのテクニクなどなかなか実践できるものではありません。しかし、応援団はとても詳しいのです。野球であれば「内角に直球を投げるからいけない」とか、「この選手は高めに弱い」とか、サッカーでも大相撲でも然り、ある意味無責任といえばそうかもしれませんが、見方は鋭く間違っていないのです。時には、審判の誤審を指摘することもあります。

これに比較すると、われわれ科学者は、無観客で試合をしているようなものではないでしょうか。その姿を思い浮かべてみてください。勝敗のみ、あるいはせいぜい得点までしか知られない。どのような試合展開だったのか、逆転があったのか、などは全く知られない。スポーツがこの状態では、あきらかに成り立たないでしょう。科学もまた然りではないでしょうか。科学にも応援団が必要です。応援団は、科学者ではないが、科学に関心を持つ人たちです。スキルや関心の深さは問いません。多くの人々に応援をしてもらいたい。

応援団の育成は、従来の理系人材育成とは全く異なるでしょう。われわれ科学者は、科学に感情が入ることを良しとしてきませんでした。原理があり、測定があり、法則があり、数式があり、結論があり、というように、ひたすら客観性を追い求めてきました。科学を実践するためには、それも必要でしょう。しかし、応援団はそうではありません。喜怒哀楽など、人間の豊かな感性に訴える、まさに文系の視点で科学に接する、人間的な物語やエピソードで科学を知る、これが鍵になるでしょう。こうして端緒が開かれれば、その後は科学者には関係なく、応援団は独自に自己増殖をしていくでしょう。それを期待します。

（やお たけし、平成26年退職、元エネルギー科学研究科教授、
専門分野は結晶化学、材料電気化学、生体材料化学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

老化哀感仮説

近藤 祥司



幼稚かもしれないが、好きな本に「星の王子さま」がある。若い「王子さま」の対話相手が「老人」（文中では大人と表現）であり、「老人」も何となく理解できる？年齢に、私もなった。作者サンテグジュペリは、子供の頃は「王子さま」である読者も後に「老人」になることを暗示し、「成長」とのトレードオフとしての「老化」を描いている。

長年、高齢者医療と基礎老化研究に従事する経験をもとに、「老化という生存戦略～進化とのトレードオフ」（日本評論社）を出版した。学術的視点で「老化」を論じ、人類が進化上獲得した形質が、老化してどのように負に働くのかを詳細に分析している。ここでは、そこからはみだした話をしてみたい。

私が設立したアンチエイジング外来も十数年経ち、初期からの患者さんにも変遷がある。いつも明るかった患者が認知症になり、顔つきがポーとしたり、険しくなったりという現実直面する。診察室の心の中で、「もう一度ニコニコ笑ってくれ」と、願うときがある。自身の無力と同時に、人生を感じる瞬間である。

我々は、思い出と過去の中に生きる生き物ではない。しかし、時々（あるいは度々）、後悔・反省し、過去を思い出す。我々の人生の中で実際、ささやかなトレードオフが、頻回に起こっている。一方、寝たきり老人に対して、「人間万事塞翁が馬」の話をするヒトはいない。ならば、老化そのものがトレードオフされることは、不可能なのだろうか。歴史的に、20数個の老化仮説の中には、多くの悪者（酸化ストレスとか、ミトコンドリアとか）が登場する。〇〇悪者説と同様に、老化を悪と捉えて「老化悪者仮説」と呼ぶべきだろうか。しかし老化研究の進展は、老化と生命の営みの密接な関係を明らかにしつつある。老化を否定すれば、生きることも完全否定しなければいけない。

サンテグジュペリは、「王子さま」がいなくなるラストシーンにより、読者の心の中に永遠に生きる「王子さま」（つまり老化から分離される）を提示した。三島由紀夫の遺作「豊饒の海」でも、主人公の輪廻転生が繰り返される。しかしそのラストは、「星の王子さま」とは少し異なる。認識のヒト本多と、出家した門跡の60年ぶりに再会する、苔庭のシーンである。門跡は、本多の説明を聞きながら、「心やさかいに」と、にっこり笑って過去は無いかのように振る舞い、本多は愕然とする。三島が最後に示した、「老化」が新たな「進化」を生む可能性であろう。

「若さ」と「老い」の対比の中で、老化はすべてにおいて、見劣りする。でも、若い時にない、全く新しい境地が生まれるならば、老化とは素晴らしいことであろう。ここでは、もう一つの老化仮説を個人的に提唱したい。それは、老化は切ないけど、素晴らしいということだ。「老化哀感仮説」とでも名付けよう。「老化という生存戦略」が本当に存在するのかどうか、それを証明するのは我々自身である。同時に私の願いでもある。

（こんどう ひろし， 医学研究科准教授， 専門は老年医学， 地域医療）

[目次に戻る ↗](#)

話題

令和元年病院長賞表彰式を挙行

医学部附属病院は、5月8日（金）に病院長賞表彰式を挙行了しました。

この病院長賞は、本院における教育、研究、診療、管理運営等について、極めて顕著な貢献があったと認められる若手教職員または診療科等を表彰する制度として設けられ、個人および団体の推薦の中から3組の受賞者が決定され、表彰されました。

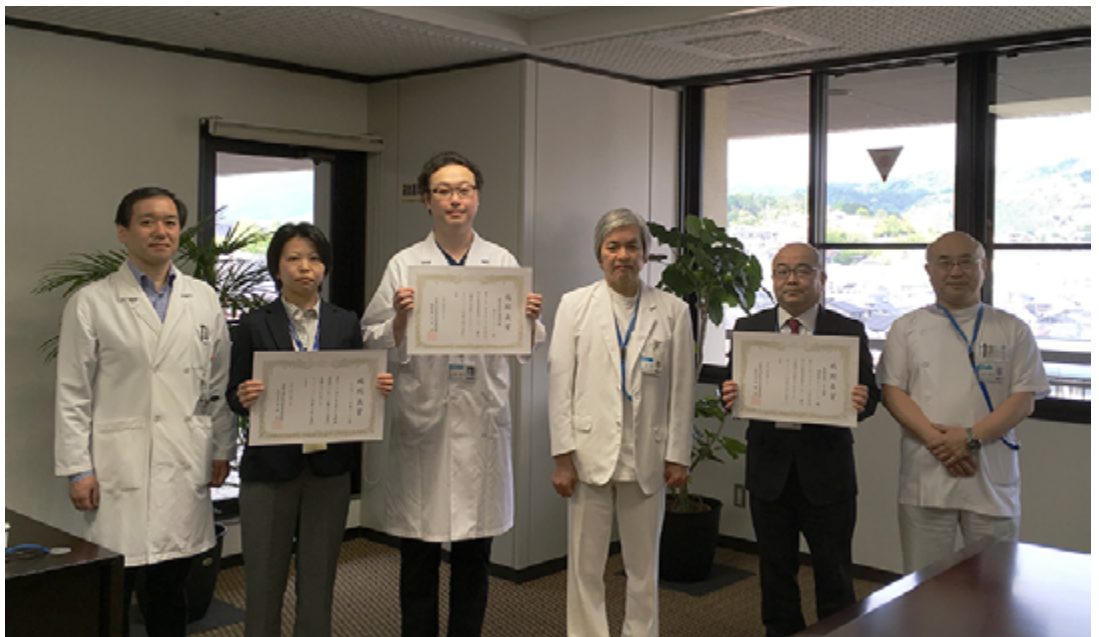
表彰式では、宮本 享 病院長より、表彰制度設立の趣旨および受賞者の選出方法について説明後、3組の受賞者および受賞内容について発表を行い、表彰状を授与するとともに、祝辞を述べました。

令和元年病院長賞受賞内容

①がんゲノム医療チーム

がんゲノム医療中核病院として、我が国におけるモデルとなるがんゲノム医療診療体制を構築しました。

- 1) 自由診療および保険診療でのがんゲノム医療提供に関して、関連部署と連携し円滑なワークフローを構築しました（患者・家族からの問い合わせへの対応、院外紹介患者の対応、診療の流れ、検体の流れ、会計の流れ、レポートの流れ、エキスパートパネル開催の流れ、治療の流れなど多岐にわたります）。
- 2) 西日本を中心とした28のがんゲノム医療連携病院とのエキスパートパネル（専門家会議）を毎週開催するとともに、連携病院に対するがんゲノム医療実施体制構築の支援と人材育成を行いました。
- 3) がんゲノム情報管理センター（C-CAT）への臨床情報登録に関して、ヒューマンエラーをなくすためのシステムを構築しました。
- 4) 保険診療でのがんゲノム医療に関する病院負担をなくすための「預かり金制度」を構築しました。
- 5) がんゲノム特別外来を新設し、院内におけるがんゲノム医療実施の実務的支援を行いました。



受賞した団体の代表者の集合写真

話題

②特定共同指導対策WG（ワーキンググループ）メンバー

本WG（ワーキンググループ）メンバーは、適正な保険診療を行う保険医療機関としての質の向上をミッションとし、医療者に対し保険医療機関の保険医の行うべき保険診療についての啓発と具体的な指導を行う活動に取り組みました。令和元年9月に行われた厚生労働省による特定共同指導において「適正な保険診療の実施に取り組んでいることをよく理解することができた」との評価を得たことは当WGの活動の評価でもあり、本院が行う保険医療機関としての保険診療の質の向上に貢献しました。

③Ⅱ期病棟（中病棟）移転WG（ワーキンググループ）メンバー

中病棟の竣工、移転において、中心的役割を果たしました。

（医学部附属病院）

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、田中渥夫 名誉教授、梶 慶輔 名誉教授、梅原 郁 名誉教授、原田 誠 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

田中 渥夫 名誉教授

田中渥夫先生は、5月12日逝去されました。享年82。

先生は、昭和37年京都大学工学部工業化学科を卒業、昭和39年同大学院工学研究科修士課程を修了、昭和44年同博士課程を修了し、同年京都大学工学博士の学位を授与されました。昭和43年3月京都大学工学部助手に採用され、講師、助教授を経て、昭和61年教授に就任、工業生化学講座を担当されました。平成5年には大学院重点化にともない、大学院工学研究科合成・生物化学専攻生物化学講座応用生物化学分野の担任となりました。平成14年定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。

本学退職後は、平成14年4月から平成21年3月まで中部大学工学部教授を務められました。

先生は応用生化学、中でも微生物の炭化水素代謝、酵母ペルオキシソームの機能と生合成、生体触媒の固定化と利用に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、微生物学・バイオテクノロジーの分野において多大の貢献をされました。これらの研究成果は、434編の学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。主な著書に『固定化細胞』、『酵素工学概論』等があります。これらの業績に対して昭和45年日本醗酵工学会斎藤賞、平成9年日本生物工学会生物工学賞などを受賞されました。また、日本生物工学会、日本農芸化学会、日本生化学会、酵素工学研究会、アメリカ微生物学アカデミーなどにおいて、会長、理事、評議員、フェロー等の要職を歴任されました。



(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

梶 慶輔 名誉教授

梶 慶輔先生は、4月6日逝去されました。享年81。

先生は、昭和38年3月神戸大学工学部を卒業、同年4月京都大学大学院工学研究科修士課程に入学、昭和40年3月同課程修了後、同博士課程に進学、昭和43年3月単位修得退学されました。同年4月京都大学工学部高分子化学教室助手、昭和52年8月京都大学化学研究所に配置換え、昭和56年12月同研究所助教授、昭和63年4月に教授に昇任され、材料物性基礎研究部門第二研究部門を担当されました。平成14年3月定年退職され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられました。

先生は、散乱法(X線, 中性子, 光)を用いて、高分子の結晶化過程, アモルファス構造, ゲル構造の形成過程, 高分子電解質溶液の構造など高分子物理の分野で重要な未解決問題に挑戦し、多くの優れた成果を挙げられてきました。特に高分子の結晶化誘導期におけるマイクロ相分離構造形成の発見は先駆的な研究成果として世界的に高く評価されました。これらの業績に対し昭和60年度高分子学会賞, 平成16年度繊維学会功績賞を授与されました。また、アメリカ物理学会, ゴードン研究会議, ヨーロッパ物理学会などからたびたび招待講演を依頼されました。

これらの業績に加え、財団法人日独文化研究所評議員, 東京大学物性研究所附属中性子散乱施設運営委員会委員, 社団法人繊維学会副会長, 先端繊維素材研究委員会委員長を務められ、広くわが国の学協会の発展に貢献されました。

(化学研究所)

[目次に戻る ↗](#)



梅原 郁 名誉教授

梅原 郁先生は、5月3日逝去されました。享年86。

先生は京都府出身、昭和32年に京都大学文学部を卒業後、昭和37年3月同大学大学院文学研究科を修了、神戸学院大学助教授を経て昭和44年京都大学人文科学研究所助教授に就任、昭和56年教授に昇任されました。平成9年に退職して京都大学名誉教授の称号を受けられた後は、就実女子大学(のちに就実大学)教授、黒川古文化研究所所長などを歴任されました。

先生は、中国近世史研究の第一人者として顕著な業績を挙げられ、人文科学研究所においては「中国近世の都市と文化」、「中国近世の法制と社会」等の共同研究班を組織し、若手研究者の育成にも努められました。この間、官僚制度の構造を鮮やかに解明した『宋代官僚制度研究』を発表されるとともに、法制史の研究を進められ、上記研究班の報告書である論文集や『訳注中国近世刑法志』を刊行されました。こうした法制史研究の成果を集大成したのが『宋代司法制度研究』です。同書は、唐朝半ばか



ら約200年続いた動乱の中で唐の制度が有名無実化した後、宋朝が唐律令の骨組みに沿いながら、その内容を新しい社会の現実に対応するように再編し、これが後代へと受け継がれていく展開を考察したものです。この画期的な労作に対し、平成22年に日本学士院賞が授与されています。

(人文科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

原田 誠 名誉教授

原田 誠先生は5月20日に逝去されました。享年84。

先生は、昭和34年3月京都大学工学部化学機械学科を卒業、昭和36年3月同大学院工学研究科修士課程を修了、昭和40年9月同博士課程を修了して、京都大学より工学博士の学位を授与されました。

昭和39年4月京都大学工学部助手に採用され、同工学研究所・原子エネルギー研究所助教授を経て、教授として昭和57年12月から平成8年5月まで原子エネルギー研究所で原子核化学工学研究部門を担当され、引き続き平成11年3月までエネルギー理工学研究所で分子集合体設計研究分野を担当されました。

平成11年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。平成3年4月から平成4年3月まで化学工学会理事を務められました。化学工学関連の分野に微視的な物の見方を取り入れる研究で数多くの顕著な業績を挙げられ、平成9年度に化学工学会から「分子化学工学に関する研究」で学会賞を受賞されました。本学退官後、平成16年4月から平成18年3月まで同志社大学にて客員教授を務められました。平成28年には瑞宝中綬章を受章されました。



(エネルギー理工学研究所)

[目次に戻る ↗](#)